

7) キンシバイ＝金糸梅

キンシバイはオトギリソウ科の半常緑低木で約 1m の株立となる。半常緑とは、冬になっても完全に落葉せずに、半分ぐらいの葉が翌年まで残るものをいう。梅雨の頃、花径 4cm ほどの濃い黄色の美しい花をたくさん開く。しかし地表近くに垂れ下がって咲くことが多いため、あまり人目につくことなく、どちらかというところの花の存在を知らない人も多い。花弁はほぼ円形で 5 枚あり、花柱も 5 本あって、雄蕊はこれに対応して 5 群に別れている。花柱(カチュウ)も花糸(カシ)も黄色のために花全体がよく目立つ。花容は梅の花を黄色にしたようにも見えることから、この名前が付けられた。次にご紹介する『未央柳』は、花糸が花弁より長くどこことなく弱々しくみえる反面、本種は花弁の中に全てが納まった感じで、花としての力強さがある。原産地は中国南部で、和名は中国名をそのまま用いており、中国では『雲南連翹』(ウンナンレンギョウ)ともいう。平賀源内が著わした『物類品鑑』(ブツルイヒンシツ)によれば、わが国に渡来したのは宝暦 10 年(1760 年)のことだという。また「くさやまぶきとするは非なり」と記されており、『草山吹』と呼ばれたこともあったらしい。どちらかというところ暖地性のため、関東以北ではあまり植えられないが、庭園や公園の下草がわりとして最適である。繁殖は実生でも挿し木でもよく増えるので、人家に近い山野で野性化していることも少なくない。学名は『*Hypericum patulum*』で、属名は下草を、種小辞は散開したという意味である。

ヨーロッパにはこれと同じ仲間西洋キンシバイという品種があり、イギリスでは『セント・ジョンズ・ウォルト』(Saint John's wort=聖ジョンの草)と呼んでいる。この草には雷や魔女から守る力があるとされ、魔女除けとして玄関の扉に十字架とともにかけておく習慣がある。またこの花を枕の下に入れて眠ると熟睡できると信じられている。しかしこの花は北欧諸国ではかつて、太陽を仇とする魔女たちに捧げられ、暗黒と悪天候の象徴とされていた。後世、このことを知った宣教師たちは、この花に新たに有益な意味を与えたために、今日に至ったといわれている。

チロルの登山家の間では靴の中にこの草を入れておくと、疲れることなく登山したり、歩き続けることができると信じられている。また北アメリカの南東部及び中央アメリカには『セント・アンドリュース・クロス』(Saint Andrew's cross)という種もあり、こちらの方はトンボの羽のような 4 弁の黄色い花を咲かせる。クロスといわれるのはこのためである。この他にも北アメリカには『セント・ピーターズ・ウォルト』(Saint Peter's wort)という種があり、これは前種よりも背丈は小さいが花は大きい。それぞれに『聖』がつくのは長い歴史の中で同様の意味合いが付与されてのことなのだろう。

花は切り花としてもよく用いられるが、この季節は特に花の乏しいときなので、次の未央柳とともに貴重な存在である。秋になると果実ができ、これは褐色に熟して 5 裂する。英国の品種には美しく赤熟するものもある。



キンシバイは梅雨時のうっとうしさをやわらげてくれる数少ない花の一つである。



キンシバイの花を知る人は意外と少ない。足元で咲いているためにあまり目立たないためかもしれない。しかし手にとってよく見ると、なかなか可憐な花である(さいたま市浦和区)。



キンシバイの花、くもりのない鮮やかな黄色である(さいたま市緑区)。

[目次に戻る](#)